
コンビニ・エヴォリューション

三代渡吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コンビニ・エヴォリユーション

【Nコード】

N5320D

【作者名】

三代渡吉

【あらすじ】

未来のスーパーはとても発達していた！でもコンビニはそのままだった。

未来の世界、右を見ても左を見てもスーパーは大発展を遂げている！

しかし、そんな中、その周りに散在しているコンビニは、思った以上に昔と変わらなかった。

それでもしっかりとお客はくるのだから、やはりコンビニエンスというのは偉大なのだろう。

だが、バイト店員達の向上心は、そんな変わらない店の体系を、果たしてどのように感じているのか？

パワーパーク

PPストアといえば、この世界ではとても有名なコンビニである。コンビニと言われれば、これとあと二つがパツと出てくるほど、日本で知らない奴は非国民だと極端なことを言われてもおかしくないぐらいだ。

経営はそれ故にとっても安定していた。でも、店員達の向上心は留まることを知らなかったのだ。

「先輩」

「なんだよ大木田」

「目の前のスーパー見てくださいよ」

「ああ、すごいな」

「ロボット売ってるんですよ？ 何のために使うかわからないけど、ロボット売ってるんですよ！」

「そうだなあ……あ、いらっしやいませー」

「比べてうちは、どうですか？」

「肉まんですねー、120円です。丁度いただきます。ありがとうございます」

「見てくださいよこれ。変わらぬ味、変わらぬ形の肉まんですよ！」

「お前さあ、人が仕事してる時に後ろで騒ぐなよ」

大木田はやかんが沸騰したみたいに怒って暴れた。後ろにあった映画のDVDコーナーの棚が少し崩れた。

「先輩は！！ 悔しくないんですか？！」

「俺、別に社員じゃないし」

「このままじゃ、客がみんなスーパーに取られちゃいますよ！」

「ちゃんと客も来てるよ。あ、いらっしやいませー」

「……………」

「157円です………… 557円頂きます。おつりは400円丁度に…」

「…」

「あー嘆かわしい。どうしてコンビニは進歩しちゃいけないんだ…」

「…」

「ありがとうございます！。とりあえずお前仕事しろ」

先輩が大木田の尻を蹴り飛ばした。ごもつともな話だった。

「でも先輩、このままじゃやる気出ませんよー！」

「店長に言いつけるぞ、コイツは…………」

大木田は床に寝転がると、駄々っ子のように騒ぎ始めた。地面でしかも体を回転させている。

そんなに悔しいのだろうか、と先輩は面倒くさくなったので無視した。

「大体パワーパークってなんですか？！ 力公園って意味わかりませんよ？！」

「静かにしろよ。お客がいるんだから」

「ヤダヤダヤダー！！ なんか新しいこと出来なくちゃ嫌だー」

「……………」

「お前電子レンジの中に詰めて破裂させるぞ」

「それは嫌です」

ムクツと大木田が起き上がった。頭に埃がついていたので、先輩は怒りをこめながら、彼の頭をバシバシ叩いた。

また泣きそうになっていじける大木田。イライラが募る先輩。そ

んな二人の間に、店長がヒョコツとやってきた。

「確かに飽きてくるよねえ」

「て、店長」

「大木田の気持ちわかるよ、うん。つまんないよね」

「店長、何言ってるんですか」

「やっぱりコンビニも進化しないといけないんだよ」

「そうですねー!」

大木田の目が輝いた。先輩はこれぐらいのやる気出して仕事しろと殴りたくなった。

「でもさ、スーパーと同じことしてもつまらないじゃないか」

「うーんそうすると、どこで差別をつければ良いんでしょう?」

「あの仕事……あ、いらっしやいませー」

二人が悩む。先輩は仕事をする。理不尽な構図だ。

「あー!! 俺いい事思いつきました!」

「本当かね」

「はい、電子マネー2000円分ですね。少々お待ちください、手続きをいたしますので……」

大木田が何か紙に図を書く。店長はそれを見てうんうんと頷く。

先輩は電子マネーの用紙をお客に渡す。

「君!! これは面白いよ!! 天才的だ!! よし、今から早速工事にとりかかろう」

「本当ですか、ありがとうございます!!」

「またのご利用をお待ちしており……つてお前等仕事しろ!!」

「先輩。店じまいですよ」

「え?」

何がなんだかわからなくなった先輩は、呆然とニコニコする二人を眺めた。

「今から工事だ。これはきつと客が増えること間違いなしだぞ!!
うわはははははー!!」

「……………」

先輩は、あまりの怒りに、後ろのDVDコーナーの棚をぶん殴った。陳列されていた見本のDVDケースがポロポロと落ちて、店長の禿頭に直撃した。

数日後。あっという間にコンビニの改装が終わった。

新装開店とデカデカと告知されたコンビニは、町の住民の興味をそれなりに集めた。

そして早速、一人の客がコンビニの前に現れた。客は啞然としてそのコンビニを眺める。

「……なんで四階建てになってるんだ？」

PPコンビニエンスストアと、ドデカイ看板が設置された横には、エレベーターとエスカレーターが設置されていた。

どうしてこんなデパートみたいになってるんだろうと疑問を持ちつつも、客は一階の扉を開けようとする。

「あれ？」

ガタツガタツ、という音がするだけで、開かなかった。よく見ると、四階からお入りくださいと書いてあった。

仕方ないなあと客は横に周った。とのあえずエレベーターを使うまでもないと思った客は、エスカレーターまで行ってみるが、これもまたすごかった。

見上げても上の様子がさっぱりわからないぐらい、そのエスカレーターは長大だった。おまけに昇りしかなかった。

昇りしかないことに疑問を持ちながらも、客は少し恐れを持ちつつも、足を運んだ。

「……どうして途中で降りられないんだよ」

混乱しながらも、客は出来るだけ静かにエスカレーターに乗っていた。でも、途中で長すぎだと思ったので、歩いて飛ばした。

本当は、エスカレータを自力で上がるということはいけない行為であつたが、もう既に常識はずれのコンビニだったので、彼の知つたことではなかつた。

上まで必死の思いであがつてみると、そこでは笑顔の中年男性、つまり店長がお待ちかねであつた。

物凄い満足気というか、自信たつぷりといった店長は、早速その客を店まで案内した。

店の商品の並びを見てみれば、ほとんど内容は変わっていなかつた。食品関係は勿論、飲料水、雑誌、通販、電子取引機械が並んでいるだけだ。

一体何が変わつたのだろうか……と思ひながら彼は弁当と雑誌と飲み物を抱えて、レジへと向かつた。

しかし、見渡す限り、レジはどこにもなかつた。

「お買い上げですか？」

「はい」

「ではこちらにどうぞ」

ノリノリの店長に紹介されていくと、そこには意味不明なものが設置されていた。

「すいません」

「はい。なんでございましょう」

「これ……なんですか？」

「見ての通りでございます」

「どうするんですか？」

「レジに通じてますので、どうぞ『お滑り』ください」

「……あの」

「どうぞ『お滑り』ください」

店長が笑顔で圧力をかけてくるので、客は仕方なくそれを使うことにした。他に帰還手段もないようなので、仕方なかつた。

男は滑るために、その場に足を前に広げて座り込んだ。そして手で自分の体を押して、そのウォータースライダーから滑つた。

シューーーーーッ！！　と水飛沫をあげながら、男は滑っていった。

彼の履いているGパンはびしょぬれになり、シャツはグシヨグシヨに濡れて肌に張り付き、生々しい肌の色を映し出した。

一番被害甚大なのは靴下。子どもの頃、こういう濡れた靴下のまま遊んだ記憶が彼にはあったが、もう楽しめる年ではない。

さらに勢いよくスパーーーーッと滑っていると、途中横からコーズに向かって滝が落ちていた。それを客は見事にザバーッと被った。

それが二・三回続いたところで、ようやくウォーターライダーのゴールが見えた。最後には、客を受け止めるためのプールがちゃんと待ち構えていた。

ザブーーーーーン！！！！

「お、先輩。客が来ましたよ」

「そうだな」

「第一号ですよ。興奮しますね！！」

「弁当がバラバラだな」

プールには、弁当の中身が散乱していた。雑誌も浮かんでいた。お客も浮かんでいた。

仕方ないので、先輩は客のところまで行って、大丈夫ですかと声をかけた。

それで我に返った客は、死んだような目のまま、散らばった弁当を出来る限りかき集め、落ちた衝撃で手から落ちた飲み物と雑誌も拾い集めた。

「いらっしやいませーーーー！！！！」

大木田は、物凄い元気に接客挨拶した。

「3点ですね。お会計いたします」

客は、ビシヨビシヨのまま大木田のことを眺めていた。

「お弁当温めますか？」

非の打ち所の無い笑顔で、とても明るく弁当のことを聞いてくる彼に、お客は暗い声で答えた。

「その前に商品を取り替えてください」

「はい。店長……！ さっきのお客様の商品、スライダーに流してください……い！」

「やっぱりいいや。飲み物だけでお願い」

お客は、諦めてそれを断った。

「それと……」

「はい。電子マネーをお買い上げですか？」

「いやさ。この携帯電話弁償して」

そこには、画面がブツツと切れた携帯電話が、カウンターに差し出されていた。水没したのである。

それを見た大木田は、しまった、こんな時のことを考えてなかった！という顔をして、先輩を見た。

先輩は、そんな彼に対して、目が笑ってない笑顔のアイコンタクトで返した。「知るか！」と簡潔に。

「では、我々が責任を持ってこちらは弁償させていただきます……とほほ」

大木田が、とてもしょんぼりとしながら客に謝罪をした。自分が弁償する羽目になりそうなせいかな、彼は涙を流していた。

だが、そんな彼に対して、客はさらに容赦なく注文をつけてきた。「もう一ついいかな」

「はい……なんでしょう」

涙ぐむ大木田に対して、客は、体をガクガクブルブルと震わせながら近づいてきた。

何とも言い難い威圧感に大木田も震えるが、そんな彼をさらに脅すように、客は詰め寄るようにして顔を近づけて、こう言った。

「い、今の……もう一回やらせてくれ……！」

「え……っ?!」

先輩は驚いて、プールの中へとずっこけた。彼のポケットに入っ

ていた携帯電話も、水没した。

二週間後。コンビニはあっという間に潰れた。

「なんだってんだよ、こんチクショオオオオッ！！」

先輩はキレて、自分が働いていたはずの店の壁に、スプレーで畜生といくつもいくつも落書きをした。

数分で警察に捕まった。

（後書き）

ハイパーなスーパーがやたら好評で、うれしくなって書いてしまった作品。そしたらとんでもない駄作になってしまいました。先輩に愛の手を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5320d/>

コンビニ・エヴォリューション

2010年10月8日15時50分発行